

未 来 の 農 薬

農薬企業に働く者のバックボーンは、人類の繁栄の基礎である食糧増産のために必須の資材を供給していることへの自負であろう。

日本生産性本部が刊行した「西暦2000年の地球」編・アメリカ環境問題諮問委員会・国務省、監訳・田中努によると、2000年の世界人口は、1975年の41億人から63億5千万人に増加すると予測している。食糧生産の方は、2000年までに耕地は僅か4%しか増えないが、生産量は1970年にくらべ、90%増加するという。この増加率は人口増加率よりかなり高い。これは、肥料・農薬および灌漑のような収穫増進のためのエネルギー多使用の投入物および、技術のより集中的利用から生ずるであろうことを示しているとしている。より高性能の農薬・難防除病害虫・雑草に効く農薬の創出に対する期待、必要性は今後一層高まるものと思う。これまでの農薬は収穫ロスを阻止する性格が強いが、21世紀には積極的に増収作用を備えた農薬の実用化が進むであろう。これは、新しい範疇の農薬であり、農薬と呼ぶより他の適切な名称を与えた方がよいかも知れない。

今後、さらに多用される農薬の安全性の確認、確保のための試験研究、調査の重要性は、ますます高まるであろう。新製品の創出と、その安全性の確保がバランスして、好ましい農薬の使用形態が定着し、農薬利用についてのコンセンサスが得られていくものと思う。未来農薬の理想像を描き、この実現に一步でも近づくよう努力を重ねたい。

〔財団法人 日本植物調節剤研究協会理事
日本農薬株式会社取締役 開発部長 渋谷正弘〕

目 次 (第16巻第7号)

中晩柑類の品質の向上

——育種面より——……………2

＜果樹試口之津支場 奥代直巳＞

1. 育種方法と問題点……………2
2. 育 種 の 現 状……………3
3. 今後の育種の方向……………4

沖縄県におけるさとうきび栽培と雑

草防除……………5

＜沖縄県農業試験場 内原 彪＞

1. 栽培環境の概要……………5
2. 栽 培 状 況……………5
3. 栽培型と雑草……………8
4. 除 草 問 題……………9

昭和56年度冬作（麦類・いぐさ・水
稲刈跡）関係除草剤・生育調節剤試

験成績概要……………11

＜財団法人 日本植物調節剤研究協会＞

第1表 昭和56年度冬作関係除草
剤・生育調節剤の有効成分およ
び判定結果一覧表……………12

第2表 昭和56年度冬作関係実用
化除草剤使用基準一覧表……………15

第3表 昭和56年度冬作関係実用
化生育調節剤使用基準一覧表……………18

昭和54年度非農耕地用除草剤試験成
績概要……………18

＜財団法人 日本植物調節剤研究協会＞